
レイ&ユウ

レッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レイ&ユウ

【Nコード】

N2036G

【作者名】

レッド

【あらすじ】

かつて、異性にモテた男がいた。あまりにモテ過ぎたせいか、独占欲の強い者達の戦い「争奪戦争」が開始された。それから、長い年月の末、その男の生まれ変わりとなる主人公が生まれた。しかし、未だ戦いは続いていた。

第一話「出会いと戦いの始まり」

かつて、異性にモテまくっていた男がいた。

しかし、あまりの浮気癖があつたせい、恨みを抱く者もいた。

要は、その男がいろいろ手を出しすぎたのが原因である。

その男が死んで、長い年月が経過したころ

その男の生まれ変わった、赤ん坊が生まれしてきた。

当然、過去のことなど知っているものは、この時代には存在しなかった。

一部を除いては

物語は、生まれ変わりの少年が、17歳になったところから始まる。

その日は雨が降っていた。

朝には晴れており、天気予報も、ずっと晴れているようなことを言っていた。

学校からの帰り道、登校時に使っていた自転車を学校に置いてバスで帰ろうと思った。

しかし、何分みんな同じ考えの為、かなりの満員となっていた。

下校ラッシュに、完全に遅れてしまった、社^{やしろ}神は、仕方なく走って帰ることにした。

「……どっかで、雨宿りしたほうがいいかな」

最初こそ、雨は降っていたものの、それほど強くもないので、多少濡れても平気な人なら、気にすることでもなかった。それなのに、雨は弱まるどころか、逆に強くなってきてしまっている。

「……………あれ？」

いつもの通学路、普段自転車を使っているから、この道は毎日のように通る。

しかし、ちょうど家と学校の中間地点らへんに、小さな小屋があった。

この小屋を見るのは、今が初めてだった。

確か、ここには、小屋じゃなくて、神社だったような……………。

不審に思いながらも、なんとか雨宿りができるスペースは存在していたので、そこに避難することにした。

もはや土砂降りと言っていていいほどの、強い雨と風に嫌気をさしながらも、びしょ濡れになってしまった体を、なんとかかしたかった。ビショビショの服を着ているほど、気持ちの悪いことはない。

「こりゃ、もう濡れるのを気にしてるレベルじゃねえな」

ここまで濡れてしまったんだ。

気にせず、さっさと家に向かった方がいいよな。

そう思い、駆け出そうとしたところで、小屋の扉が開いた。

「水も滴るいい男発見」

意味がわからなかった。

扉の隙間から顔を出したのは、身長はちょい低めの、黒くて長い髪の毛の巫女服のような格好をした、女性だった。

「そこにいると、風邪をひくと思いますよ？」

「ええまあ、今から走って帰ろうかと」

普通に受け答えをしてる自分がいた。

「よろしければ、このボロ小屋の中に入りませんか？ 温かいものを出しますよ」

優しそうな眼に、意外に親切な人だった。

意外と言っては失礼かもしれないが。

「……いいんですか？」

女性は、そつと微笑み

「ええ、ダメならこんなこと言いませんよ」

とても綺麗な女性だった。

言われるまま、小屋に入れてもらう。

それほど広いとは言えず、例えるなら山小屋みたいなものだ。

暖炉のそばに椅子が二つ、そして暖炉はメラメラと火が燃えていた。

「これで、濡れた体を拭いてください。あと、そのままだと寒いでしょうから、この大きめの毛布を渡しますので、服を脱いでください」

言われて素直に受け取る。

今まで、他人にここまで親切にされたのは、初めてのことだった。

田舎の人間は優しく、都会の人間は他人に冷たい、と勝手に思っていたけど

中には、こういう人も居るんだな……。

「ココアですけど、構いませんか？」

「はい、ありがとうございます」

「いえいえ、困った時は助け合うものですよ」

なんていい人だ。なぜか感動している自分がいた。

「家は、この辺なんですか？」

空いている椅子に腰を下ろしながら、巫女服の女性は聞いてきた。

「えと、そんなに遠くはないんですが、ここから、歩いて20分くらいですかね」

「それじゃ、もう少しゆっくりできますね。雨が止むまでくつろいでいてください」

ニツコリと微笑み、ココアを飲む。

そういえば、この人はここに住んでいるのだろうか？

「ここには、一人で暮しているんですか？」

「いえ、ここには、二人で暮しているんですよ」

「へえ、旦那さんですか？」

「私まだ17ですよ？」

相変わらず、即答で笑顔で返事をしてくれたが、今の質問に対しての笑顔は、怖かった。

「あ、えと、すみません」

「いえいえ、たまーに間違われるんですよ。たまーに。ふふふ」

怒っているような気がしたので、別の話題にしてみる。

「ここに小屋があるなんて、さっき知ったんですけど、いつ頃から住んでいるんですか？」

「ずいぶん昔からですよ。お気づきになりませんでしたか？」

あれ……。もしかして、神社だと思っていたのが、実はこの小屋って。

ありえない、よな。大きさが違うし。

「ずっと、ここに神社があるものだと思っていたので……」
「……………」

あれ？ 黙り込んだじゃった。

そんなに変なこと、言ったのかな……？

まあ、小屋を神社だと思っていたなんて、馬鹿としか

「あなた、もしかして、社 神さんですか？」

「え？ あ、はい……………」

何をいきなり、というか、何で名前を知っているんだ？

巫女服の女性は、何か考え事をしている。

「まずいですわ。いつまでもじっとしていられませんね」
「はい？」

「すぐにここを離れた方がいいです。この土地は危ない！」

何を言っているんだ、この人は。

意味がわからない。さっきはゆっくりして行けと言っていたのに。今は危ないから、ここから離れるって、どっということだ？

「まさか、社さんにいきなり会えるなんて……運がいいんだか悪いんだか」

「あ、あのお、俺……何かしましたか？」

「いえ、あなた自身は何も。ただ、しつこい連中から見れば、絶好の標的となるでしょう」

い、意味がわからねえ……。
突然壊れ出したぞ、この人。

「気づかれる前に、避難しないと……」

「だーもう！ 何がどうしたって言うんですか！ やっぱり、俺が何かしたんでしょう？」

「詳しい説明をしている暇はありません！ また後ほど、時間があれば説明します」

も、もう、ついていけねえ……。

「こんな時にユウッたら、どこ行ってるんだか……」

勢いよく立ちあがり、周囲を見回す巫女さん。

そして、何かを確認したのか、こちらに視線を移す。

「まだ大丈夫のようです。今のうちに逃げましょう」

「さつきから、何を言っているのかわからないんだけど。逃げるってなんで？」

「何者かが、あなたの命を狙っているからです」

はい？

「ぶ、ははははははは！ 何の冗談ですかっ！ 俺を嫌いな人は、どこかにいるだろうけど、命を狙ってくるやつなんていないでしょうに」

「冗談ではありません」

「何で、そんなことがわかるんですか？」

根本的な質問をする。

初めて出会った人が、俺の事情を知るはずがない。第一、今まで何もなかったのだ。それがいきなり、命を狙われているから逃げる、なんて誰が信じるといふのだ。

「……仕方ありません。今、説明するしかないようですね」

巫女さんは、床に正座をして、俺の目を真剣な顔で見る。

「今から、だいぶ昔の話になります。あなたの前世の話ですね」

「俺の、前世？」

前世の話が、なぜ出てくるのかわからないが、それがここから逃げるといふ理由につながるというのなら、ためしに聞いてみるのもいいかもしれない。

それを信じる信じないに限らず。

「かつて、社せいの喜一きいちという男がいました」

社、ということは、俺の先祖に当たる人なのだろうか。
確か、聞いたことがあるかもしれない。

「その男は、当時いろいろな女性に好かれていました。逆に男性からは嫌われていたようですが」

女たらし、ということか？

「しかし、いくら女性に好かれていたとはいえ、独占欲の強い人たちにしてみれば、他の女など相手にしてほしくない、そう思っていたでしょう」

いったん区切り、目を閉じる。

「そう言いだした女性が一人出てくれば、そう思う女性が増えてきました。しかし、喜一は、そんなのお構いなしに今まで通り付き合っていたと言いました。まあ、納得されなかった女性が、大多数のようでしたが」

言っていて、嫌になったのか、手に力を入れている。

小刻みに体が揺れているのが、何よりの証拠かもしれない。

「そこから始まったのが、『第一次、社争奪戦争』です」

「なに、その戦争!？」

第一次ってことは……

「もちろん、二次戦争もありました。くだらない戦争です」

「まあ、くだらないわな」

何やってんだよ、ご先祖さん。

「戦争は3年と続き、決着がつく頃には、ほとんどの女性が、喜一を嫌いになっていました」

「なにその結末！？ 3年も戦争しておきながら、結局嫌いになって終わったって……」

ほんとにくだらないうぞ、そんな戦争。

歴史に残るわけは、ないわな。

「喜一さんの最後は、『女がないのなら、死ぬ』、と言って、自害しました」

「なんで、そんなにくだらないんだ、うちの先祖。それが本当だったら、嫌だな」

「いえ、事実です。社家の歴代の記録にも記されています。疑うのでしたら、ご確認を」

俺でも知らないのに、そんなのがあると、なぜ知っているんだよ。

「えーと、あなたは、家の家系とどういう関係？」

「代々、お仕えしていますね。陰ながらですが」

「お仕えの人がつくほど、家はそんなに凄くないよ？」

再び、真剣な眼差しで俺をみる。

「今話した通り、戦争を始めた、張本人の家系ですので、それ以降、あなたの家系は狙われています」

「何やってくれてるんだよ、先祖さんよお」

「大丈夫です。そのために、私たちがいるのです」

そんなこと言われても、いまいちピンとこない。

そんな歴代の記録書というのが、本当にあるかどうかは、確認するとして

本当だった場合、家の家族は全員狙われている、ということですかね。

「いえ、今回はあなただけです」

「え？ 何で」

「喜一の生まれ変わりだからです」

「なに！？ つうか、どこでそんなのがわかるんだよ」

敬語を忘れて、叫ぶ俺。まあ、同い年だから、平気かな。

「喜一には、はっきりとした特徴がありました。それが、異性を引き寄せるフェロモンはもちろんのこと、首筋にほくらが二つ、覚えのない傷痕もあるはずです。お尻に」

フェロモン？

「そんなフェロモンなんて……」

普通じゃありえないほどの、男子より女子の友達の多さ。

何もしていないのに、バレンタインでもそれなりに貰っていたり……

「……………」

「心当たりは、あるようですね」

「フェロモンのおかげで、できた友達だったことか」

「大方、きっかけはそうですが、後は、あなたの女性に対する優し

さではないでしょうか」

……なんとも言えない気分だった。

そのフェロモンがなかった場合、女子の友達など、一人もできなかっただろう。

なんでこんなに、女子と仲良くできていたのか、ようやくわかったような気がした。

「そんなわけで、過去からの因縁、と言うんでしょうか。とにかく、17歳となった時点で、あなたは一人の男として認められ、命を狙ってもかまわない状態になっています」

「俺の人権、完全無視だな、おい」

「第四次、社抹殺戦争の始まりです」

「抹殺！？ 争奪戦よりやばいだろ」

第四次って、いつまで続くんだー！

とか言っても、無駄なんだろうな……。

「それで、あなたをお守りするために、朝方ここに来たのですが」

「ずいぶん前から住んでるって言ってたよね？」

「はい、神社をつぶして住んでいるのですから、一般人には、昔からここに小屋があった、と思い込ませる必要があったのです」

「やっぱり、俺の記憶は正しかったってことだよな」

「はい、ですから、術に全く影響がないのは、社神さんが、あなたを狙う刺客か私たちくらいです」

「ここに住んでる、もう一人の人？」

「そうです」

うーん、なんだろうな、信じていいのか？

一応、話は分からはなくはないし、嘘を言っているようにも見えないし。

「で、この土地が危ないってのは？」

「もともと、ここに張っていた刺客がいたわけです。一応追っ払ったのですが、あなたがここにいるとなると、連中の縄張りみたいなものですし、気付かれて、戻って来られてもこちらとしても困るんですよ」

ここが襲われれば、小屋が壊れて、住む場所がなくなる、ということか。

「……わかったよ。まだ半信半疑だけど、とりあえず、ここから出ればいいんだろ？」

「ごめんなさい、別の場所であれば、戦闘になってもかまわないのですが……」

「誰だって、家を失いたくはないでしょ。気にする必要はないよ。もう、雨も止んでるみたいだし」

外を見てみれば、もう雨は降っていなかった。

帰るのなら、今のうちだろう。

「そんじゃ、お邪魔しました」

「いつでも、お守りしていますので、気にせず今まで通りの生活をしてくださいね」

「そつするよ」

言って歩き出す。

言い忘れていたが、服はちゃんと乾かして着ている。
どこかスースーするのは、気のせいだろうか……？

「見つけたわよ！ 社！」

聞いて、その声の主の方を見るのに、時間がかかっていた。
俺の視界に、そいつが入って来た時には、すでに攻撃態勢に入っていたのだ。

「危ない！」

対抗するように、巫女さんがお札か何かを取り出していた。
それに、何かぶつぶつと唱えてから、その札を投げた。

「くっ」

バチィッ

見事に俺の目の前に出てきた札は、攻撃してくる敵の攻撃を見事に
はじいた。

「くそ！ まだいたのか、巫女の女」

「あたしがいる限り、神さんには手出しさせません！」

次に取り出したのは、日本刀だった。

巫女さんはそれを構えると、刃先を刺客に向けた。

「護衛役ってことか。なら、先にあんたを始末してやるよ！」

刺客の女は、いわゆる、九の一のような格好をしていた。
日本刀の巫女さんに対し、短剣とクナイが武器のようだ。

「神さん、下がっててください！」

「は、はい」

向かってくる刺客に対抗して、敵に向かっていった。

金属がぶつかり合う音が響き、二人は互いに背中を向ける感じで止まっている。

切りあいで、よくここでどちらかが倒れるのは、アニメや時代劇と
かでも見かける。

「はっ！」

「ふっ！」

そんなすぐに決着がつくわけがなく、振り返り、再び向かっていく
二人。

金属音が鳴り響く。

二人の実力差は、それほどないように思える。
それは、素人目線で言えばの話だ。

「うぐっ！」

先に折れたのは、刺客の方だった。

「あんたに、手加減は無用のようね」

そう言っただけ何かを取り出す九の一。

筒……？

「これで、おしまいよ！」

言っつてこっちに投げる。

「！？ 逃げて、神さん！」

反応したのは、遅かったのかもしれない。
だつてほら、もう筒は地面に付きそうだもの……。
何が起るのかは、わからない。

でも、危険なことだつてのは、なんとなく予想がついた。

「はあっ」

巫女さんは、素早く札を投げて、それをはじく。
はじかれた筒はそのまま、地面を転がる。
爆発か何かが起ると思ひ、身を引く俺。
しかし、その筒は何も起らなかつた。

巫女さんも不審に思つたのか、その筒を眺めていた。
そして気づく。それは、ただの筒であると、それが罠であることを。

「かはっ」

気付いた時には、遅かつた。
敵から視線を外した時点で、罠にかかつていたのだ。
ほんの数秒のことなのに、それが何分にも何十分にも思えるほどだつた。

明らかな隙だらけ、絶好のチャンスだつた。

見事に背中に短剣による攻撃を受けた巫女さんは、衝撃で前のめりに倒れる。

背中に切り傷がくつきりとついていた。

血が諾々と流れて、見るからに重傷だった。

「あつ……」

そして、俺も気づく、巫女さんが倒れた時点で、敵の標的は俺に移っていたことを。

元から狙いは、俺一人。巫女さんへの攻撃は、邪魔者排除のため。続けざまに、攻撃を仕掛けてくる敵から、逃れる術などない。

ただの一般人にすぎない俺には、達人のような動きをする奴の相手などできるわけがない。

むろん、素早い動きなど、することも、見ることもできない。

「ぐっ!？」

血が周辺に飛び散る。

ただ、その血は俺ではなかった。

「……言いましたよね？ し、神さんには、手出しさせない、とっ
」

痛みを堪える、震える声で

巫女さんは、握っていた日本刀で、思いっきり、刺客の足を斬りつけていた。

距離が少し離れていたから、深く斬ったわけではない。

しかし、それでもその傷は、足に力が入らないくらいの激痛を与えるには十分だった。

「ちいつ」

いきなり、バランスを崩した刺客は、先ほどの巫女さん同様、前のめりに倒れる。

なんとか、斬られていない方の足で、片膝を着くことで耐えた。

すぐに立ち上がり、斬られていない左足で体を支えながら、後を振り返る。

巫女さんもなんとか立ち上がり、刀を構える。

背中に受けた傷は、思ったよりも深いものではない。油断したとはいえ、一応何らかの防御はした。

それでも、激痛が身体全体に伝わり、立っているのも辛い感じでもある。

お互いに一撃。

普通の人間ならば、即刻救急車を呼んで、病院に行くほどの傷だ。平気で戦っていられるはずがない。

だがそれは、命のやり取りをする者達にとって、関係のないこと。どちらかが倒れるまで、終わらないつてのは、フィクションではよくある話だ。

ましてや、戦う理由が、戦争にまでなった理由が社喜一という男を恨むがための戦い。

それに命をかける意味があるというのだろうか？

その男本人が死んでからも続いているらしいが、それに何の意味が？晴らせなかつた恨みを、その男の家族、孫やひ孫で晴らして何になる。

そんな理由、納得できない。できるはずがない。

臆病な人間の考えかもしれないが、こんな闘いなど起こしてほしく

「邪魔するんじゃないよ！ 兄貴っ」

「おまつ……人の忠告は聞くもんだぜ！ だいたい、怪我してるじやねえかっ」

ビシッと、刺客として来た女性（年齢不明）の足を指差しながら叫ぶ男。

「こんなの大したことねえよ！」

「何を言うか！ 年頃の娘にそんな傷なんかつけるもんじゃねえよ！ 即刻帰って治療するぞ！」

屋根から勢いよく飛び降りる。

その衝撃で、屋根から「バキッ」という音が聞こえたのは気のせいだろうか。

そして、兄貴と呼ばれた男は、その妹？ の手を取り、帰ろうとする。

「ちょっと、お待ちなさい」

そこへ、巫女さんが歩み寄る。

「悪いな。このまま帰らせてもらっぜ、あんたも早く傷の手当をするんだな」

それじゃ、と立ち去ろうとして

「そういつことじゃないのよ。そちらの娘は、今はどつでもいいんです」

「はい？」

「あなた、今屋根を壊したわよね？ 直していくか、修理代をだしてもらえないかしら」

顔はあくまで笑顔で、ただし内面の怒りは抑え切れず、俺の目からでもわかった。

「ああ、いや……うん。すまなかった！ では」

そそくさと、二人の姿が消えた。

「待ちなさい！」

ああ、だんだん巫女さんの印象が変わってくる。

決して、悪い人ではない。ということだけはわかったけど。

まあ、助けてもらったわけだし

「ありがとう」

その言葉が聞こえたのか、先ほど二人がいたところを恨めしそうに睨めつけていたが、こちらに振り返って

「困った時は、お互い様ですから」

最初に出会った時と同じ笑顔で、ニコリと微笑む。

本格的に困るのは、これからのかもしれない。

実際に敵が来たわけだから、さっきの話を信じるしかないだろう。

第四次、社抹殺戦争。

それまでの経緯など知らないが、これから命を狙われるということ

だけは、理解したくはないが、するしかなかった。

翌日

「あれ？」

自分の家の隣に、何やら見知らぬ家が建っていた。

自分の部屋から見た景色なのだが、明らかに、昨日までの家とは違う。

まさか……

「神！ ちょっと来なさい」

突然部屋のドアが開き、母さんが血相を変えて入ってきた。

まさか、異変に気付いたのか。

「人様の家にパンツを忘れてくるって、どういうことよ！」

「はいいい!？」

「母さんは、母さんは、あまりの悲しさで、涙も出てこないわ」

ええと、どういうことだ？

俺が、自分のパンツを、人の家に忘れてきたと？

おいおい、パンツを脱ぐ状況って、どんなだよ。

まだ、そんなこと

「あ」

言っただけで気づく。確か昨日、土砂降りのような雨でびしょぬれになり、

たまたま見かけた小屋で、巫女さんに休ませてもらって……
風邪をひくからと、服を脱いだんだった。
そして、

昨日、風呂にも入らず、帰ってきて着替えずに、そのまま寝たんだ
った。

「まあまあ、そうお気になさらずに」

母さんの後から、昨日の巫女さんが現れる。

「あ……」

「隣に住んでる、江藤です。覚えてませんか？」

普段、隣の人と会う機会など、ほとんどない。

会ったのは、ごみ出しのときか、最初に越してきた時だ。
確かに名前は、江藤。

また、入れ替わりやがったな。

それも、俺の護衛のためだとわかりつつも、今まで住んでいた、本
当の江藤さんは？ という疑問で、何も言えなかった。

「まあ、昨日お会いしましたし、覚えてますよ」

「あんたいつたい、何をしたのよ！」

母さんと、面識はないのか？

それとも、術とやらで気づかないってだけか？

そんな疑問も抱きつつ、とりあえず母さんを落ち着かせなくては。

「今後とも、お隣同士、よろしくお願いしますね。社さん」

ニコリと微笑んだ表情を見て

「こ、こちらこそ」

と返す母さん。とりあえずは落ち着いたか？

「息子さんの体って、たくましいんですね」

「……え？」

一瞬、何を言われたのかわからない母さん。

しかし、言われたことを理解し？ 俺にもものすごい顔で睨み付けてくる。

「あんた、やっぱり、何かしたんでしょ！ 怒らないから、薄情なさいっ」

「いやっ、すでに怒ってるしいっ、つうか、普通言わないでしょそんなことおー！」

わざとに決まっている。素で言うはずがない！
ほら、笑ってるし！

戦争以前に、命がいくつあってももたない。そんな風に思えてしま
う。

笑えない冗談は、やめてほしい。お願いだから。

そんなこんなで、お隣に巫女さんがやってきました。
何でって？

それは

「小屋の屋根に穴が空いてしましまして、修理するにもお金がありません。ですから、もとから出来ている、小屋より頑丈な家に住もうと考えると、神さんの家の隣に住むことにしました。その方が護衛しやすいですし」

そういう訳で、俺の180度変わった日常は、幕を開けた。

第二話「学校」

社抹殺戦争というものが始まった。

狙われるのは、なぜかこの俺。

どうやら、前世に女性から恨みをさんざん勝ったらしい。

どんな恨みかはわからないが、戦争になるくらいだ。よっぽどの理由がある、と思う。

いつまでも引きずり続け、ついには第四次とまでになってしまった。こんなくだらない戦争は、たぶん今回で終わると思う。

社喜やしろきいち一の生まれ変わりである、俺社やしろしん 神がいるのだから。

別に、俺が止められるわけではない、よ？

結果的に、喜一が生まれ変わってくれば、そいつで恨みを晴らせばいいわけだし……

って、これって死亡フラグがたっているのでは……

「おはようございます」

そう挨拶してきたのは、同じクラスの工藤さん。

学校の自分のクラスで自分の席でぼーっとしていたが、その声の主の方を向くことにした。

「おはよう、工藤さ」

言っつて固まる。

「どうかしましたか？ 神さん」
「なんでいんの！？」

いきなりの叫びに、教室に居る生徒たちがこっちを見る。

この驚きには、意味がある。

『第四次、社抹殺戦争』の始まりを覚えてくれたのは、今日の前にいる女性だった。

この人との出会いは、先日、土砂降りの雨が降ったせいで、傘を持たず、走って帰っていたせいで、服がびしょ濡れになった。

その時に、たまたま見つけた、見知らぬ小屋で少し雨宿りをしようとした。

その小屋から出てきたのは、巫女服を着た女性だったのだ。

初めこそ、普通に親切に接してはくれたが、俺の名前が社神と知ったとたんに、俺の身に迫る危険を説明してくれた。

それが、『第一次、社争奪戦争』から始まり、今に至る、『第四次、社抹殺戦争』の始まりについてだった。

その後、雨が止んだからと、小屋から出た俺に、一人の刺客が現れた。

その時に助けてくれたのが、その小屋に住んでいた巫女さんだった。

この巫女さん。実は俺を護衛するために来てくれたらしい。

戦いこそ決着はつかなかったが、俺を十分といえるくらいに護ってくれたことから、俺は巫女さんを信じることにしたのだ。

ただ、この巫女さん。

戦いとは関係のないところで、小屋の屋根に穴が空いてしまったため、思い切って俺の家の隣に住んでいた『江藤』さんと入れ替わって、住むことにしたらしい。
それに気づいたのが今朝。

そして、目の前にいるのが、『工藤』さんと入れ替わった、巫女さんだった。

もちろん、そんなことに気付いているのは、俺くらいなものだが。理由はたぶん、江藤さん家に俺と同じクラスの子供がいなかったからだろう。

「おはよう。工藤さん」

心を落ち着かせながら言う。

「ごめんなさいね、驚かせちゃって」

小声で、俺に聞こえるようにしゃべる。

「聞きたいことがあるんだけど」

「なんですか？」

疑問の一つを述べてみることにした。

「入れ替わった人は、どうなるの？」

入れ替わりをするということは、入れ替わる前の今で言う『本当の工藤さん』はどうなったのかが、気になった。

「大丈夫です。保管室で眠ってもらってますから」
「全然大丈夫じゃねえ!？」

再び叫ぶ俺に、みんなからの視線が集中する。
俺は特に気にせず、小声で話を進める。

「ってことは、工藤さんは、ずっと眠ったままってことなのか?」
「こちらから見ればそうなるでしょう。しかし、彼女は、夢の中で
今までの生活をしています」

「夢の中で、て?」

「簡単に言ってしまうえば、夢の中で生活をしているってことです。
実際に眠っているという感覚はありませんから、夢の中では普通に
食事をし、睡眠をとるでしょう」

本人は、眠っているという自覚はない。

夢の中で、いつものように学校に登校して、みんなと会話して、普
段と変わらない生活をしている。
現実ではなく、夢の中で。

「そんなことする意味あるのか?」

「すいません。こちらにも、事情というものがありません……。勝
手ながら、入れ替わらせてもらいました」

事情と言われても……。

だいたい、入れ替わりなどしないで、普通に転校生という形で入っ
て来れないのか?

俺の疑問に気付いたのか、苦笑を浮かべて

「できれば私も、普通に転校生として通いたいです。でも、それが
できないから、こうしているんです」

まあ、そうなんだろう。
もし、「その手がありましたね」とか言い出してたら、俺はどうしていただける？

命の恩人でもあり、こうして俺の命を護るために、ここまでしてくれているのに、怒るなんてことが、できるのだろうか。

「戦争を一刻も早く終わらせて、いつも通りの生活に戻しましょう」
力強く言う彼女の瞳は、やる気に満ちていた。

「そう、だな。というか、何をもってして、戦争が終わりになるんだ？」

「今までの終わり方ですと、刺客を全員倒すか、死ぬまで逃げきるかですね」

「ろくな結末を迎えてないな……。全員倒すって、何人だかわからないし」

「ざっと、千人ですかね？」

「ざらっと言っな、ざらっ！ 多過ぎだろそれ」

千人だと？ 笑わせるな。そんなの相手にできるはずがないし、逃げきるのも難しいだろう。

というか、戦闘を行うのは、この巫女さんなのだが……。

俺も少しは戦えるように鍛えろと……？

無理だろ、そんな所そこの奴らを相手にするわけではないんだぞ。

今まで普通に生きてきた人間が、ちよつと鍛えたからって、敵うはずがない。

格闘技の世界チャンピオンだって、どうかかわらないんだぞ。

早くも絶望が見えていた。

「大丈夫です！　どんな敵だろうと、私かなぎ倒しますから」

彼女の言葉は、自信に満ちているように見えた。

内面では怖いだろうに、俺を元気づけようとしてくれているんだと思う。

「と言ってもな、千人なんて、どんだけ敵がいるんだよ」

正直、千という単位の間人なんて、見たことがない。

学校でも、全校生徒合わせて、五百人とかそんなところだろう。

その倍の間人が、俺一人を狙ってくるって？

考えたくもなかった。

いくら大丈夫と言われても、戦争というくらいだ。向こうの目的は同じなのだから

もし、まとめて来られた場合、護り切るなんてことは、巫女さん一人じゃ無理に等しいと思う。

『戦闘』になるのは一対一とか、数に差がほとんどない時だろう。

それが、数だけの戦いになれば、それは『戦闘』ではなくなってしまう。

「……………そうですね。残念ながら、いつペンに来られても、私じゃ対応しきれませんね。早く終わらせるのなら、その方が早いのですが……………」

言いながら、落ち込んでいく巫女さん。

……………あれ？

この巫女さんの名前って、まだ聞いてないよな。

学校では「工藤さん」なのだが、それ以外だと、何て呼べば……………

「えと、工藤さん」

「はい、なんですか」

「君の名前は、なんて言うの？」

「工藤ゆきなですけど？」

当然のように言う。

まあ、確かに学校では、その名前だけど
本名、というものが知りたいわけで……

「ええと、その名前じゃなくて」

「遙に、別の呼び名なんてあるの？」

割って入ってきたのは、同じクラスの倉川くらかわはるか 遥

「工藤さん」の昔からの親友である。

入れ替わったことに、気づいていないってのは、何とも違和感がある。

親友の目からでも、明らかな違いは分からない

それが、巫女さんの入れ替わりの力なんだろうなあ。

「別に、他の呼び名なんてないよ。これから考えるとこ、かな」

チヲ、と工藤さんを見る。

特に気にした様子もなく、頭の上に「？」と浮かんでいるようだった。

「ねえねえゆきな、今年はどうする？ ゆりかのアレ」

「はい？ アレとは、なんですか」

「え？ この間話したでしょ。忘れたの？」

入れ替わる前の話だ。内容は俺には分からないが、工藤さんと倉川さんの間で交わされた話なのだろう。

巫女さんが、どの程度まで工藤さんの事情を把握しているのかはわからない。

少なくとも、入れ替わるということは、相手のことを多少は理解していなければならぬと、思うのだが……。

「えと、……ああ、アレですね。まだ何とも」

「そうなんだ、実は私も迷ってる。今日の放課後にでも、一緒に探しにいかない？」

「探す……？ えとあの、そ、そうだね……特に用事がなければ」「んじゃ決まり、帰りにちょっと先生に話すことがあるから、ちょっと待っててね」

話が、分かっていないご様子で……。

まあ、俺にはどうすることもできないわけですけど。

「あの、神さんもどうですか」

巫女さんは困り顔で、俺をみる。

その一言に、倉川さんは一瞬驚きを見せたが

「ふーん。いいね、社君に選んでもらえれば、ゆりかも喜ぶと思うし」

俺には、異性を引き付ける、フェロモンというものがあるらしい。前世の自分。喜一にあったのを、そのまま引き継いだらしい。

そのおかげか、女子に人気は少なからずあるようだ。あくまで、フェロモンのおかげなのだろうな。

その事実を知ったのは、昨日、巫女さんに聞いた喜一の生まれ変わ

りである証のひとつらしい。

「……特に、何もなければ」

その言葉を笑顔で受け止め、授業開始のチャイムが鳴ったので、工藤さんと倉川さんは、自分の席に戻っていった。

教室の窓が開いていた。それは換気のためだろう。

標的の相手は、窓寄りの席に座っていた。

ここからなら、狙うことも可能だろう。ただし、失敗すれば、他の人間に当たってしまう。

しかし、躊躇いなどなかった。ただ、目標を見つけることができた喜びで、失敗など恐れている様子は微塵もなかった。

狙いを定める、幸いヤツは、別の事に意識を向けている。

気づかれる前に始末するべきだろう。

そして、構える。獲物の位置を再確認し、そして、放った。黒く尖った何かを。

社神は、普通に授業を受けていた。

それが普通の光景で、授業中に誰かと喋るという行為は、一切することなどなかった。

今まではそうだった、別に喋っているわけではない。

自分の席の真後ろに、工藤さんが座っている。それは変なことではない、普通だ。

俺にしかわからない、別人の工藤さんが、なぜか気になっていた。

バレるわけでもないのに、いつかバレてしまうのではないかと、い

らぬ不安を感じていた。

工藤ゆきなは、周囲を警戒していた。

自分の役割は、あくまで社神の護衛。

そのための入れ替わり。敵がいつ来てもいいように、常に戦闘準備は整っていた。

そして気づく、窓から入ってきた黒い何かを。

普通の人間の反射神経なら、間に合わないだろう。

放たれた矢に気付いて、それを眼でとらえてから、危険だと脳で判断してから、避ける体制に入る。

飛んできた何かを、なんだろうと疑問を抱いている間に、手遅れになる。

だからこそ、そんなものを気にする暇があるのなら、行動に移す。それが私のやり方だ。

カツ！ と、見事に手裏剣が刺さった。

社神の首に刺さる直前に、なんとか手元の教科書で防ぐことができただ。

当然、社も気づく。手裏剣に、というよりは、突然自分の横に出された教科書に。

ゆきなは視線は、すでに窓の外に向いていた。

ここは学校の三階。高い木なら、ここまでは届いているだろう。

少なくとも、真横からではない。真横ならば、社よりも窓側に座っている生徒に当たってしまうからだ。

斜めからでも無理。ということは、ここより少しでも高めの位置からのものだろう。

それを考えると、もう場所はひとつしかなかった。

「すぐに、窓を全部閉めてもらえませんかっ」

勢いよく立ちあがり、ゆきなが叫ぶ。

その行動に、クラスの誰もが驚いた。

無理もないかもしれない。入れ替わる前までは、工藤ゆきなという人物は、図書室でよく本を読んでいる、大人しい人物、という印象なのだから。

言われるまま、窓側の人たちが、窓を閉めようとした瞬間

「そんな無駄なことは、する必要ないよ」

どこから聞こえたのか、辺りを見回しているとゆきなが

「急いで立つてください！ ここでは危険です」

状況は、いまいち把握できないが、言われるまま立ち上がる。

おそらく、敵が来たのだろう。

「ちょっと！？ どこにいくのですかっ、工藤さん！ 社くん！」

授業をしていた教師が叫ぶが、それを無視して教室から出ていく。

「アタシから、逃げきれると思ってんのかねえ」

教室には、わけがわからないといった表情の、教師と生徒だけが残されていた。

廊下を走りながら、俺は質問する。

「何がどうなってんだ!? 敵が攻めてきたのか」

「そうです。手裏剣があなたに向けて飛んできたということは、戦争の関係者です」

後ろを気にしながら、どこかに逃げ道はないものかと探るゆきな。

「右にずれてください!」

特に考えずに、言われた通りにずれる。

すぐ横を、何かを通り過ぎたのが確認できた。

「昨日の巫女が、まだ社の近くに居やがったとは、面倒くせえ!」

舌打ちをする。だが、予想していなかったわけではない。

なんとなくそんな気がしていたのだ。護衛役つてのは、本当だったみたいだな。

前方を走る二人を見る。

巫女の方は、こちらに意識を向けながら様子をつかがっている。

逆に社の方は、こちらの姿を確認などせずに、走ることだけに集中しているようだった。

「やはり、昨日のくのーでしたか……」

「昨日のって、あいつがまた来てるのかっ。傷を負っていたから、もう少し時間置くと思っていたのに」

「治療能力があるのでしょうか。私もそれで、多少の治療をしましたから」

昨日戦ったとき、巫女さんは背中に、くのーは足に傷を負った。

お互い、大量に出血するほどの傷を負ったにも関わらず、再び戦闘を仕掛けてきやがった。

「大丈夫、なのか？」

「問題ありません。昨日は仕留め損ないましたが、今回こそ打ち取ってみせます」

「そうじゃなくて、怪我の方」

「……だ、大丈夫です。多少の痛みはありますが、傷は塞がっていますので」

できれば戦闘は避けたい。

だが、そんなことはできない。社神を護衛するのが、仕事なのだから。

「階段を上がります」

「え、下に降りた方が、外に出られるだろ」

「いえ、そうしたいのは山々なのですが、今は授業中、体育をやっている生徒であふれています」

合同体育をしているのだろう。

それじゃ、無理か。

気がつけば、屋上にいた。

誰もいなくて、下から聞こえてくる、体育をしている生徒の声以外は、静かなところだった。

「もう、追いかけてこはおしまいなのかい？」

くの一が一步踏み出す。

「周りに誰もいない方が、あなたもやりやすいでしょう?」

「まあ、そうだな。いない方が、お互いのためだしな」

お互いが距離を取り合う。

俺は邪魔にならないよう、遠く離れた位置から見ている。

やっぱり、複雑な気分だ。俺の命を狙ってきた敵を、自分ではなく、巫女さんに護ってもらおう。形としては、女の子に護ってもらっているようなものだ。

だからといって、自分が向かっていったところで、邪魔になるし、そもそも、瞬殺されるのがオチだろう。

「あんたを先に始末しないと、どうも社あいつを始末させてもらえないみたいだね」

「当然です。それが私の使命ですから」

「護る意味なんてあるのかねえ? あんな男に」

「神さんは、関係ないでしょう。ただのあなた方の八つ当たりの標的にされただけです」

その言葉に、眉をわずかに動かすくの一。

「八つ当たり、ね。確かに何も知らないあんたから見れば、そうかもしれない」

「自覚はあるようですね」

「うるせえよ。こっちだって、ホントは喜一のヤローに恨みを晴らしてえんだ。そいつの生まれ変わりだろうが、恨みを晴らすにはちようどいい」

「それって、八つ当たり以外のなんですか」

喜一本人に仕返しができないから、その生まれ変わりである俺で恨みを晴らそうだなんて……。

こっちとしては、納得できるわけがない。

命を狙われている身としては、もっとマシな理由があってほしいのだが……。

「喜一がしたことは、ただで済まされねえことなんだよ！ なのに女が居なくなつたから死ぬなあ！？ 最後までふざけやがって！ だからアタシは、何十年も何百年も待つた。同じ家系の奴らを殺しても晴れやしねえ恨みを、生まれ変わりである社神でなら、晴れるかもしれねえからな」

それは、俺に向かつての言葉だった。

喜一が何をしたかなんて知らない。これほどまでに恨みを買ったことをしたことは、なんだろう？

俺には想像がつかない。

「どんな理由があろうと、あなたは人間でなくなつたわけですね。その超人的な身体能力の説明がつかしました」

「ふん、木から教室の中に飛び移つただけで、超人的と言ってるようじゃ、この先もつと凄いのが来た時、どんな反応をするのかねえ？」

十分凄いよ。しかも、ただ飛び移つただけではなく、あの巫女さんですら気づけない速さで教室に侵入してきたのだから。

「あくまで、身体能力は、です。あとは普通の人間と変わらないですよ」

「ほう、それはどういう意味だい？」

「動きが早いだけで、後は普通の人間より戦闘力がある、ということ

とでしょうか。簡単に傷を負いますし、痛みも感じるから、昨日みたいに足を軽く斬られただけで動けなくなる」

言いながら、構えをとる二人。

昨日とは違って、日本刀がないから、武器というのは……

「なんだ？ それは」

「見てわからないのですか？ チョークですよ。あとは、カッターですね」

おそらく教室から持ってきたのだろう。チョークを数本持っていた。

「そんなもので、戦うと？ ふざけやがって！ 即効で終わりにしてやる」

巫女さん目掛けて走り出す。その手に握られているのは

「そつちも、木の枝とは、ずいぶんふざけていると思いますよ」

お互いが、そんなもので戦うのかと思うものを握りながら、敵に向かっていく。

間抜けな戦いに見えるかもしれない

「知ってます？ チョークって、甘くて美味しいですよ」

「んな下らねえ嘘かまして、どうしようってんだよ！」

巫女さんがチョークを投げ飛ばす。

「喝……！」

瞬間、チヨークが破裂した。粉が周囲に飛び散った。

「目くらましか!？」

続けて、カッターの刃を投げ飛ばす。

それを木の枝で叩き落として、反撃の態勢に入る敵に対して、巫女さんは立ち止まり、札を構える。

そっと目を閉じ、何かを唱え始める。

「いつまでも、あなたと遊んでいる暇はありません」

目を開き、視線の先に敵を捕らえる。

「最後の最後まで必殺技を隠している意味はありませんし、何よりも、必殺ですから。当たればいいわけです」

札を持つ手を横に、片足を前にずらし、狙いを定める。

「必殺技を当てたいんなら、黙ってりゃいいだろうよ！　これから必殺技を出すつって、避けられる確率高くしてどうするんだっての」
軽く笑いながら、だが決して余裕の表情は見せない。警戒しているということなのだろう。

「ご忠告感謝します。でも、私の必殺技は、宣言したところで避けられるということはありません」

「結構な自信だな、おい！　アタシのスピードを見ても、確実に命中させられると?？」

更に動きが素早くなっていく。

人間には絶対に不可能な早さだ。忍者のような動きに、この早さ、本当に確実に命中させられることは、できるのだろうか。

「ええ、ですからわざわざ言っているのですよ。あなたごとき、これで十分です」

言って放たれた札から、竜巻のような風が巻き起こる。

フィールド全体を囲むほどの範囲だ。

確かに避けれるとかの問題ではない。

「厄介な風だが、んなのじゃアタシを仕留めることなんか」

身体が宙に浮く。足を地に着けていられる状態ではなくなったのだ。穴場と呼べる場所は、台風のように、竜巻の中心に居る巫女さんと、遠く離れた位置にいる、俺のところくらいだろう。

「そろそろ、遺言でも残しておいた方がいいんじゃないですか？
最後の機会ですよ」
チャンス

風は段々と大きくなっていく。

しかし、攻撃はそれだけではなかった。

もう一枚の札を取り出し、放り投げる。

すぐに竜巻の中に飲み込まれ、どこにいったのかわからなくなった。

「もう、喋れないみたいですね。飛ばされないように、ずっとこの風の中に閉じ込めていますし、声が聞こえないだけかもしれないですしね……。それでは、さようなら」

その言葉と共に、どこからか、強烈な光が放たれた

第三話「後悔」

生まれたときから、私は一人ぼっちだった。

周りに、知り合いなんていやしなかった。

ただ、生きていくためには何とかしなければならなかった。

それがたとえ、泥棒と言われようが、周りから仲間外れにされようが私は、最初から一人なんだと開き直って、生きていた。

年齢的に大人になった頃、一人の青年に出会った。

とても優しく、みんなから好かれていた。

最初こそ、相手にはしなかった。でもそいつは、あまりにもしつこかった。

そんなある日、私はいつものように盗みに入った。

働けるものなら、働きたかった。しかし、どこも雇ってくれないし、相手にもされなかった。

お金がなくては、何も買うことができない。

だから、盗みをして、食糧を調達する。時には川で魚をとったり、山でキノコを食べたりもした。

それでも、やっぱり肉というものは、食べてみたかった。

この辺一帯には、この町の王と名乗る偉そうなやつが仕切っていたから

豚や牛など、獣を捕まえることも許されなかった。

野生のものは、発見次第捕らえられ、調教し、使えなくなったら食べる。

農民の連中にも、買う権利というものが与えられていたが、あまりに高額なため

ほとんどの者が、食べるができなかった。

許されていたのは、低額の鳥の肉だけだった。

だから私は、盗みに入った。
金はないが、食ってしまえばこっちのものだと思っていた。
途中までは良かった。しかし、最後が甘かった。
見事に捕まった私は、王の怒りを買い、刑が下されるまで、牢に入られることになった。

そこで私は、死を覚悟していた。
冷たい牢獄の中で死んでいく。今までしてきたことを思えば、当然だと思った。

天上高くに、鉄格子があり、そこから外の光が入ってきていた。

そして私は、公開処刑になり、皆の目の前で殺されることになった。
今までの償いか、そう思うと、私は不思議とその結果を受け入れることができた。

長年盗みを働いて、最後は皆の前で殺される。

最初から最後まで、幸せだったと思えることはひとつもなかった。

後ろ手にロープを結び付けられ、見張りの者が数人私を囲んで、死刑所まで連れて行く。

皆が私のことを見ている。

知り合いなど一人もいない。それだからか、気がいくらか楽に感じられた。

今度生まれてくるときは、もう少しマシであるように、と心の中で願う。

その時だったか、いつだったかに、しつこく私に話しかけてきた青年が元気よく手を振っていた。

何を馬鹿な。あいつは、私がこれから死ぬということを知っていたい

るのか？

それとも、知った上で、笑っているのか。見送りなのか、「ざまあみろ」と馬鹿にしたように笑っているのか。

どちらでもいいか。もう死ぬんだし。

私は、静かに目を閉じて、処刑の瞬間を待った。

どのくらい時間が経ったのか、何も起こらなかった。

不思議に感じたから、目をあけることにした。もしかしたら、開けた瞬間に処刑されるのかな、などと思っただが、目を大きく開ける。

その光景に驚いた。

青年が、私の目の前に居たのだ。

何が何だかわからなかった。

結果的に言えば、その青年は私を処刑の場から助け出してくれた。

そして、町から出て、二人で暮さないかと、いきなり言われた。

死を覚悟していた私は、もうどうにでもなれといった感じだったので、OKを出した。

その時に気づくべきだったのか、話がうまくいきすぎていた事に、なんの疑問を抱かなかった。

簡単にいえば、その男に金どころか、行くあてもなかったってことだろう。

特別目立った行動はせず、私同様に盗みを働くか、騙した女の家にとがり込んだりしていたらしい。

ようは、その男もあの町には居られなくなってしまったってことだ。私を連れ出した理由はただ一つ。

私を売る為だったのだ。

奴隷だろうがなんだろうが、飽きるまで好きに使ってくれってこと

だ。

それからの私の人生は、あそこで処刑されていた方がマシだと思えるほどの苦痛を与えられ続けた。

逃げ出そうとすれば、お仕置きだと言って、扱いが更にひどくなった。

もう耐えられなくなった頃、私は捨てられた。

ようは飽きられたってことだ。

ポロ雑巾のように捨てられたところに

再びあの男が現れた。

そして、解放されたのもつかの間、再び売られ、奴隷人生が始まった。

それを繰り返された揚句に、売っても大した金にならなくなったからと言って

人体を売ろうと考えだした。

精神的にも何もかもが限界だった。

ここまで酷いやつだとは思わなかった。

そう思った頃に、同じくこの男を恨む女性たちが、戦争を起こしてくれた。

その際に、逃げることに成功した私は、黒魔術をしているという女に出会った。

私の人生の生きる目的は、あの男、名を社喜一やしるきいちへの復讐のためだけになった。

黒魔術によって、契約をした私は、人間を捨てたのだった。

戦争が終了したところに、喜一が自殺したとの情報が入ってきた。絶望的だった。

誰かが止めをさしたわけではない。
ただ、自分の周りに女が居なくなったからだと、わけのわからない理由で自殺しやがった。
それが許せなかった。
死の直前の私を、盗みなんかで死ぬなと言った男が、そんなくたらない理由で死んだ。
怒りがおさまらなかった。
人間を捨ててまで殺したかった相手はもう居ない。

だから私は待った。
そいつの、生まれ変わりというやつを。

突然の強風に耐えきれなくなったのか、身体が宙に浮かんでいき、飲み込まれた。

そして、身動きが取れなくなった時点で、走馬灯のように昔のことを思い出していた。

本当にくだらない人生だった。

恨みを晴らすことさえ許されなかった。

いったい、私という存在は何だったのだろうか。

もう、どうでもよくなってきたな。

「そろそろ、遺言でも残しておいた方がいいんじゃないですか？
最後の機会チャンスですよ」

下の方から、巫女の声が聞こえてくる。

そっぴゃ、こいつと戦ってたんだっけ。

そして、今はそいつの必殺技とかいろいろをくらったってとこだな。

抵抗する意思なんかもうないさ。
殺^やるなら、早く殺^やつてくれ。

そう思った直後、札が近くまで飛んできた。
そして、勢いよく、光を放った。

「はは……。もう、おしまいか」

死を覚悟する。

そついや、アタシを妹のように扱ってくれた奴が居たな。

「遺言、ね。だったら、兄貴に一言。ごめん、かな」

光が身体全体を包み込む。

そして、アタシの意識は薄れていった。

最後に笑顔を見せて、涙をこぼしたのを、ゆきなは見逃さなかった。
理由は分からないが、人の命を奪おうとするほどの理由があったの
は事実。

だからといって、社^{やしろ}神を殺させるわけにはいかない。
命を奪う行為は、虫であれなんであれ、気が進まなかった。

仕方のないこと、などと saying しても、心のどこかではもの凄い罪
悪感というものはあった。

「これも、仕方のないこと……。なのかな」

すべてが終わりに、竜巻が収まったとき、身体が、降ってきた。

なんの抵抗もなく、まるで人形のように、無反応。

それはもう、魂の抜け殻のような状態だった。

工藤ゆきな（仮名）は、それから眼を背けようとした。しかし、それはするべきではないと考え、倒れている少女の傍まで歩み寄る。

ところどころに傷が見られるが、大きな外傷と呼べるものはない。本気でやっていれば、跡形もなく無くなっているだろう。

形がある、ということは、少なからず手加減をした、ということだ。

「殺すのに、手加減も何もないですよね」

ぼつりと呟いたその言葉は、社神の耳にまで聞こえてきた。

戦いが終了したと思い、少しずつ近づいていたから、なのだが。

「……………殺したの、か？」

状況を見れば、予想はつく、だが確認のために尋ねる。

自分の命を狙ってきたから、殺す。

そんなことが許されるわけがない。

話し合いで済むのなら、そうしたかった。

何を今更、と思うだろう。話し合うつもりなら、始めからそうしていれば良かったのだ。

「……………」

何も答えない。まるで、殺したということを肯定するかのようだ。

「何か、こっちが悪者みたいですよ。いや、そんなのかもしれない
せんね」

顔の表情は見えない。

震える声で、言葉を続ける

「私の目的は、あくまで神さんを護ること。相手を殺せ、殺すなどは言われてませんけど……」

ぼつり、と涙がこぼれる。

「どっちが、正義も悪もないですよ。結局のところ、私には後悔というものが、残ってしまいました。彼女の涙を見てしまったせいで」

そっとしゃがんで、倒れている少女の顔を撫でる。

無反応なのが、更に悲しいという感情が溢れてくる。

社喜一という男は、どういう人間だったのかを考える。

たくさんの女性から恨まれる人間。

戦争を起こすまでの、だ。

やっぱり、かなりの悪人だったのかな。

「どうにか、ならないかな」

独り言のように呟いた一言に、ゆきなは反応した。

「……何が、ですか？ この状況を、どうにか隠したい、ばれないようにしたい、ってことですか？」

「……違う。その娘を、今からでも助けられないかな、って」

「……一度死んだ人間を、生き返らせることなんかできません。当たり前のことじゃないですか」

それはそうだ。できたら、悲しむことなんか何も無い。

わかっている。それは、叶わない夢物語だって。

「その娘から、離れなさい」

「！？」

突然聞こえてきた声に、二人して反応する。

その声の主は、校舎へと続く入口の上に立っていた。

「あなたは、誰ですか？」

「……………」

そいつは答えない。

無言のまま近づいてくる。

黒い布で全身を覆い、怪しい雰囲気を感じさせるやつだった。声だけ聞くと、女性のような感じだ。

「これで失礼するわ。邪魔したわね」

倒れている少女を抱き抱え、黒い布の女は立ち去ろうとする。

「その娘を、どうするつもりですか？」

その背中にゆきなが声をかける。

「あなたこそ、どうしようとしていたのかしら？　ただ眺めているだけなら、私が連れて行っても、問題ないわよね」

そう言って、再び歩き出す。

その背中にかける言葉など、何もなかった。

「なあ、こんな闘い、まだ続くんだよな？」

ゆきなは空を見上げながら、

「この戦いを始めた人を探しましょう。原因は喜一でも戦争を始めた張本人は、別の人のはずですよ」

どこか、決意の固まった表情で、そう宣言した。

「そう、だな。こんなことを、あまり繰り返したくはないしな」

恨まれる理由も、できるなら知りたい。

喜一という人物が、どういう人だったかもだ。

「……そろそろ、戻りましょう。授業、抜けだして来てしまいましたしね」

二人で教室に向かう。

このとき、まだ思いもしなかった。

このあとに起こる、ある出来事のことなど。

第四話「人間と化け物」

「もう、急に居なくなるから、ビックリしたじゃん」

「あはは、ごめん……」

現在、倉川遥くわがわはるかさんと、工藤ゆきなと俺、社神やしろしんの三人で、同じクラスの牧島まきしまゆりかに渡すプレゼントとやらを買いに来ている。

「プレゼントに、こんな高いものをあげるのか？」

値札に三千元以上もの金額が表示されていた。

「高いって、これはまだ安い方だけど？」

「……あ、そう」

お金はそんなに持っていない。

別に俺も買う必要はないのかもしれないが

「社君からも、何かあげた方がゆりかも喜ぶよ」

と言われたので、まあ、何かをかうことにしたのだが……。

「その、牧島さんが好きな物って、知らないんだけど」

「んー？ 何でも良いって、貰えるだけで嬉しいんだからさ」

あ、そうですか。

異性を引き付けるフェロモンというものが俺にあるため、普通の男子よりかは、女子に好かれやすい、とのことらしい。

学校の屋上での出来事から、あまり気乗りしない俺とゆきな。結局、最後の黒の布の女は、なんだったのだろうか。

パツと見、よさそうなのを一つ購入し、店から出ることにした。

「見つけたぞ……。社お神んんッ！！！」

でかでかと、叫ぶその声は男のものだった。

「神さん！ あそこですっ」

指差す方は、電柱の上だった。

そこに、太陽のせいであまり見ることはできないが、誰かが立っていることだけはわかった。

「殺す殺す殺す殺してやるうううううう！！」

「……俺って、男からも狙われるの？」

「いえ……女性だけのはずですが……」

「って、なんの話をしているのよ、二人とも！」

あ、倉川さんもいるんだった。

ここでの戦闘は、巻き込まれる。

「うおおおおおおおおお！！！！！！」

男が叫びながら、飛び降りてくる。

着地の寸前に、ゆきなは短剣で素早く、男の足を切りつけた。

「ぐおおおおおおお！？」

着地に失敗し、見事に倒れる。

頭を電柱にぶつけ、痛がっている。

あれ？ この人、どこかで……

「きさまぁ……社神！ よくもやりやがったなぁ！！」

「俺は、何もしていないんだけど？」

「とぼけるなぁ！ 妹を、よくも妹おおお！」

あ、この人。くの一の少女のお兄さんだ。

「お前に恨みは、なかった。しかし、妹を失った今！ キサマを恨んでも恨んでも恨み切れねえほどの怒りが、湧き上がってきたぜ！」

妹を失ったことにより、その兄が仇打ちで来た。というわけだろう。

「これは戦争なんです！ 誰かが死ぬことは、承知の上だったんじゃないですか！」

その一言は、発言したゆきな本人の心にも、深く突き刺さる言葉だった。

しかし、一番怒りを爆発させていた相手の男は、逆にほくそ笑んでいた。

「けつ、確かに戦争なら、死んでも文句は言わねえさ。でもなぁ、俺の妹は人間ではない。それはわかってんだろ？」

突然の発言に、ゆきなは、何を言っているんだ？ という表情で

「……人間以外も、死というものはありますよ。人間じゃないって理由で、生きてるとか言っんですか？」

「確かにその通りだ。だが、俺が言いたいのはそこではない」

そこで言葉を区切り、真剣な眼差しで

「人間を捨てる時に、契約というものがある。その契約とは、その『社神が死ぬまで、滅びることはない』というものだ」

「なんですか、その契約は。……それじゃ、命を狙って来て、それが成功した場合、自分自身も死ぬ、ということでしょう」

男は、そこで視線を逸らして

「それが、あいつの生きる理由だからだ。復讐を果たし、そして自分も死ぬ。一度捨てた人生を、喜一への復讐のためだけにここまで生きてきたんだ。俺には詳しいことはわからねえ、だが、あいつの助けになるのなら、俺は何だってする」

「つまりは、妹さんが戦闘不能の今、自分が邪魔である私を殺しに来たんですか」

言いながら、特に構えるまでもなく告げる。

「しかし、それでしたら、場所を考えてもらえませんか？　ものすごい注目の的なんですけど」

「そうだったな、場所を移すか」

「ちょ、ちょっと待って！　ゆきな、説明してよ」

わけのわからないといった表情で、遙が割って入る。

一般の人にわかるわけがない、か。

まあ、俺もちゃんと理解しているわけではないのだが。

「ごめんね、遙。今話すから」

言って近づき、何かをボソボソとつぶやく。

ここからだ、小声で何を言っているのかが聞こえない。

距離的に、5〜6メートル離れている。

大した距離ではないのだが、ひそひそ声は聞き取りにくい。

「そっか、それじゃあ私は帰るね」

「うん、また明日」

そう言っただけで別れる二人。

ちよ、ちよと待てええい！

そんな簡単に納得できる説明ってどんなだよ。

「ゆきな、お前何をした？」

「はい？ 催眠をかけただけですよ」

催眠って、そんなこともできるんですね、巫女さん。

納得していいものなのか迷っているうちに、二人は移動していた。

そのことに気付いた時には、どこにいるのか、わからなかった。

誰も居ない、ビルの屋上に二人は居た。

「あなたは、おしゃべりに来たんですか？」

「戦いに来た。しかし、その前に話したいことがある」

真剣な表情で、右の拳を握りしめる。

それは、戦闘態勢ではなく、何かを決意したような、そんな感じだ。

「俺の妹、愛美^{あみ}は、すでに人の身ではないことは、さっきも言ったな」

あのくの一の少女は、愛美という名前だったのか。

「ええ、まあ。だいたい、喜一に恨みを抱き、現代まで生きている時点で、人間ではあり得ませんから」

「普通に考えてそうだな。つまりは、悪魔なり何なり、契約をしているということだ」

「それで？ あなたは、何が言いたいんですか？」

そういえば、この男。

愛美という少女が妹なら、兄であるこの人も、人間ではないということなのだろうか。

「愛美がした契約の内容はさっきも言った通り、社神が死ぬまでだ。俺の気持ちとしては、愛美は死んでほしくない、兄としてはそう考える。つまりは、社神^{やっ}が死んでしまつては、意味がなくなるということだ」

神さんが死んだ時点で、愛美さんの人生も、戦争自体も終わる。

私は、神さんが死なずに戦争を終える方法を探しているわけなのだが。

「……そうなる、あなたの行動は、矛盾しています。神さんを殺しに来たわけですよ。それとも私を殺しに？ どちらにせよ、今の神さんは、襲われたら間違いない殺されます。だから、私という護衛役がいるわけです」

そもそも、この男の目的がわからない。
ただ話をしにきただけなのだろうか。

「それは、わかっている。さっきのは、ああ言えば、お前は付いてくると思ったからだ。社神の命を狙いに来たとなれば、お前も黙っちゃいまい。普通に話があると言って誘っても、来る確率は低そうだったからな」

どうだろう、と考える。敵とわかっている以上、警戒心は強い。このこ付いていくかどうかは、あまり考えられない。やっぱり、戦闘の意思があるものだと思うだろう。どっちにしろ、変わらないと思うのだが……。

「ご心配なく。たとえあなたが襲いかかって来ても、神さんは護り通しますから。それで、あなたは本当に私と戦いに来たわけですか？」

「ふ、妹の借りを返しにきたつもりだったが、気が変わった。俺が言いたいことは、出来ることなら、お前と戦闘はしたくもないし、させたくもない、ということだ。だが、愛美がどうしても、社神あじつしを殺さないと気が済まないと言えば、俺にはどうすることもできないがな」

満足したかのように、背を向ける。
戦闘の意思はないように思える。それでも私は、気を緩めたりはしない。

「あなたの言動は、さつきから、わけがわかりません。まあ、そちらが攻撃してこない限り、私は攻撃しませんが、妹さんが生きていたのでしたら、こんなところにはいないで、さっさと看病なり何なりで、帰ってください」

そうだな、そう言って去って行った。

実際、こちらから敵を見分ける方法なんてない。

敵意むき出して向かってきてくれるのなら、対処はしやすい。

だが、敵も馬鹿ばかりではない、暗殺という手段がある以上、常に油断などしてられないのだ。

そう、今もこうして神さんを一人にしまっていることも、危険なわけだ。

「そろそろ、戻りますかね。こうしている間も、神さんは危険なんですから」

呟いて、来た道に戻る。

ビルの屋上にいるから、飛び降りるなんてことはしない。

緊急時の場合は仕方ないと諦めるが、普段は飛び降りたくなかない。怖いから。

自分がまだ人殺しになっていないことを知れただけでも、収穫はあったのかな。

少しホッとして、ゆきなは歩き出した。

戦いは、まだ始まったばかりである。

第五話「本家」

人や動物は、生まれたときに名前を付けられる。

それが当たり前なことであり、そうされないものなどないだろう。

ただ、それにも例外がある。

そう、名前を付けてくれる人がいなかった場合だ。

なぜ、私には名前がないのだろうか？ と、何度も疑問を抱いた。

その疑問に答えてくれる人などいなかった。

ただ、そういう決まりらしい。

名付け親には、意味がある。

生みの親達からはこう言われた。

一生を支えてもらえる人に名前を付けてもらえ、と。

どこか、普通と違う。それが家の家系である。

いつの頃からか、社家を護衛することを命じられるようになり、戦闘技術等を学ぶようになった。

戦争が終わるまで、この命が終わることはない。

私の存在理由は、社神社神の護衛と共に名前を付けてくれる人を探すことだ。

だから早く、偽りの名を捨てて、自分の名前が欲しいと思うのである。

現在の私の仮の名前は

「もうすぐで着くよ、ゆきな」

窓の外を眺めながら、社神は声をかけてきた。

工藤ゆきな、それが今現在の私の仮の名前である

その名前を使っているのは、神さんの護衛の為、常に傍に居る必要がある。

そのためには、クラスメイトの誰かと入れ替わることになる。転校生として行かなかったのは、自分の名前がないからである。

まあ、神さんの家の隣に住みついた場合のみ、名前が変わるが、それ以外では『工藤ゆきな』として過ごしている。

ちなみに、入れ替わった本物の工藤ゆきなの家はどうなっているかは、いつか話すとしよう。

そして現在

学校の創立記念日と土日がつながっているため、今は三連休になっている。

それを利用して、社家の本家、つまり社神の父親の実家に行くことにした。

そこに、社戦争などの記録が残っているので、調べものの為に行くわけである。

「それにしても、父さんの実家に記録があるってことは、父さんも戦争について知っているのかな？」

「それはわかりませんね、ただ本人に関係のないことは話してないと思いますか……」

現在は神さんと二人、電車で向かっている。

ちなみに、私は前にも行ったことがある。そこで戦争のことを聞かされたのだ。

「いつぶりだろうなあ、正月に来た時以来かな」

「神さんは、あまりご両親のご実家に行かれないのですか？」

「うん、まあ。たぶん、たいていの人はそうだと思うよ」

という事は、話がしたくてもできなかったのだらう。
戦争について知っているのは、社喜美子さんと社拓郎さんぐらい。
つまりは、神さんの祖父祖母に当たる人である。

「十七歳になつてからは、初めてですか？」

「ん、そうだな。まさか、こんなことで、ここに来ることになるとは、思いもしなかったよ」

うんざりしたような顔で神は溜息を吐く。

ここに来るのが嫌だという感じだ。

「あまり、ここが好きではないんですか？」

「……なんか、苦手なんだよね。特にばあちゃんが」

「厳しそうですが、結構いい人だと思いますけど」

「まあ、何て言うかね。悪い人だとは思ってないよ、ただ雰囲気とかがさ、気疲れしそうで」

堅苦しいのは苦手だ、と言いながら、歩くペースをあげる。

行くなら早く行って、さっさと済ませようとしているようだ。

社家は、駅の近くにあるバス停からバスに乗り、三十分くらいで目的地付近に着く。

そこから歩き、五、六分で着く場所にある。

現在歩いているのは、電車から降りて、バス停に向かっている途中だ。

都会とは違い、自然だらけのこの場所はずいぶん静かだった。

邪魔な人混みもないし、空気がきれいで、将来はこういうところに住んでみたいとも思う。

ここまで来るのは正直大変で、午前中に出発したのに、今ではもう

日が沈みかけていた。

「何か、行くだけでだるいんだけど……」

「まあそう言わずに、明後日までに帰ればいいのですから、疲れはとれると思いますよ」

「そっぴや、連絡つてしてあるのか？」

「はい、昨日私の方から連絡しました。バスで行くと言ったので、お迎えはありませんが」

「……呼ぼうよ、そこは」

「何を贅沢言っているんですか。こちらの都合でお邪魔するということに」

神は大きく伸びをした。長時間電車に乗っていたためか、少し疲れてしまった。

ずっと座っているのも、楽ではない。やはり身体を動かさないと、眠気が襲ってくる。

バス停に到着したものの、一向に来る気配がない。

さっきまでの青空が、今では夕日でオレンジ色になっている。

はあ、とひとつ溜息を吐いて、ベンチに座る。

「……座らないの？」

ゆきなはずっと立っていた。座る気配はない。

「はい、私はずっと歩いていたら座りたい、ずっと座っていたら立っていたい、という感じですので」

「あ、そう」

聞く前に理由も説明されたので、何も言うことがなくなってしまう

た。

それから少しして、ようやく来たバスに乗り、目的地に着いたのはそれから三十分後のことだった。

「ふあゝあ、もう眠いんだけど」

「まだ到着したばかりじゃないですか、大変なのはここからですよ」

社家は、普通の家とそう変わらない。金持ちとかそういうのではなく、ごく普通の一般家庭だ。

隣の家とは少し離れているため、敷地が多少広めだ。

呼び鈴を鳴らし、中から人が出てくるのを待つこと三分。

もう一度鳴らし、待つこと五分。

「いくらなんでもおかしいだろ。居ないんじゃないのか？」

「……そんなはずは。もしかしたら、倉の方もしれません」

「倉あ？ なんだってそんなとこに。つうか全員そこってことか？」

倉は、家の反対側にある。

使わなくなったモノとかを仕舞っているらしい。らしいというのは、見たことがなく、話に聞いただけだからだ。

「待たせてすまないね。ちょっと、立て込んでね、出るのが遅くなってしまうよ」

そう言いながら、家の扉を開けて、中から四十代くらいのおじさんが出てきた。

社^{やちゅうじいた} 幸太、父さんの弟にあたる人だ。

「ああ、いえ。幸太おじさん、こんにちわ」

「こんにちわ。久し振りだね、それに正月以外では初めてかな」

「はは、そう……ですね」

そんな苦笑している俺の隣で、ゆきなはぺこりとお辞儀をして

「お久しぶりです、幸太様」

「……ふ、君は相変わらずだね。『様』なんか付けなくてもいいよ。今は、ええと名前はなんていうんだい？」

「工藤ゆきなです」

あれ？ 今の会話、どこがおかしい。

「ゆきなちゃんか、ではそう呼ぶとしよう」

そう言つて、扉を全開にし、「どうぞ」と中へ招いてくれる。

そんな幸太おじさんに、俺は質問してみる。

「『今は』って、どういう意味ですか？」

「ん？ ああ、彼女は会うたびに、名前が違うんだよ。ま、今回はしばらく『工藤ゆきな』として過ごすだろうけど」

「ゆきなの本名で呼べば？」

その発言に、おじさんは困った顔で「ええと」と考え込む。

そこにゆきな本人が

「私には、名前がないんです。だから今は『工藤ゆきな』と呼んでください」

表情はいつも通りの笑顔、でもどこか、悲しそうにも感じられたよ
うな気がした。

玄関から、ばあちゃんが居る部屋は少し離れていて、まっすぐ歩いて廊下の突き当たりを左に曲がって、三つくらい部屋を通り過ぎたところにある部屋だ。

家の一番奥にある部屋だと思えばいい。

まず、おじさんが部屋に入り、それから俺とゆきなが部屋に入った。その部屋には、爺ちゃん婆ちゃん、そして今入った幸太おじさんと俺とゆきなの五人。

部屋には何もなく、客間のような感じでもあるが、ここが一応婆ちゃんの部屋だ。

爺ちゃん婆ちゃんの二人は、静かに正座していて、目を閉じていた。

「お母さん、神くんたちが来たよ」

おじさんがそう声をかけ、婆ちゃんの目が開いた。優しいような雰囲気はあまりなく、厳しそうな人だ、というのが俺の印象だ。

だからこそ、目つきが怖く感じたりもする。

「よお来たのお。神、それに沙里菜さしな」

え？ 沙里菜って、誰？

そんな疑問を浮かべているとゆきなが

「今は『工藤ゆきな』という名前です」

「おおそうか、いやすまん、前の名前で呼んでしまった」

「……いえ」

さつきゆきなは、自分には名前がないと言った。

その言葉の意味は分からないが、呼び名を共通のものにしているの

だと思っていたのだが……。

「それでゆきな、神には戦争のことはどの辺まで話した？」

「簡単に説明しただけですが、本人には、狙われているという自覚は出てきたと思います。一度戦闘しましたから」

「……そうか、それでワシに聞きたいことは、なんじゃ？」

ゆきなが正座なものだから、つい自分まで正座で座ってしまった。長時間の正座は、無理だと自覚しているんだけど……。

「社^せ喜^き一^{いち}が、どんな人物だったのか。戦争を始めた張本人は誰か。それが聞きたいんです」

単刀直入に、真剣な表情で、ゆきなはそう発言した。

「……喜一という人物は、異性に好かれるという特殊な能力を利用して、手当たり次第に手を出していった男、というのが簡単な説明じゃ」

「そして、恨みをたくさん買い、戦争に至った、という話は聞いていますが、本当にただの悪人だったのですか？」

聞いただけだと、善人とは言えず、かと言って人殺しなどの罪人かと言われれば、それも違う。

最初は、自覚はなかったのではないか？

その能力に気付いた時、世界中の女性を自分のモノにしようと考えたんだ。

たぶん、そこから狂ったのではないか？

喜一の行動は、どう考えたって、好かれるよりも嫌われることをしている。

だからこそ、引き起こしてしまった戦争。

『争奪戦』と言われていたが、実際はもつと違ったものではないのか。恨みを持った人間を、好きで取り合うのではなく、嫌いだからこそ、自分で恨みを晴らしたいと考える女性が多かったのではないか。

いろいろなことを、頭の中で考えていると、婆ちゃんが喋り出す

「確かに、結果としてみれば、悪人だった。だが、途中経過で見れば、周囲の人間に好かれ、善人だったともいえる。どこかで狂ってしまったとしか言えぬな」

「それはやはり、戦争を引き起こした張本人と関係がある、ということですね？」

婆ちゃんはそこで黙り込み、何かを考えている様子だった。

「その張本人なんじやが、未だ誰も知らないんじやよ。当時戦争が起きた時は、誰がきっかけだ、などと考える者はおらんかったじやろっ」

「……戦争は今でも続いている。ということは、まだその犯人が生きているということですよね？」

その可能性はあると思う。しかし、確実ではない。

今でも恨みを抱いた連中が好き勝手暴れているだけかもしれないからだ。

……いや待て。

なぜ戦争は、俺が十七歳になったら戦争が始まるんだ？

別に未成年には変わりはないし、いちいちそんなこと気にする必要はないわけだ。

だったら、十六歳、いや生まれた時にでも襲えば、苦労はしないはずだ。

ただ単に、十七歳になるまで俺の存在は知らなかったとか？
それなら、なんで知ることができたんだ？ 知ってたけど、十七歳
まで待っていた？
それだと、意味がわからない。待つ必要はないはず。
やっぱり、今回のことも、仕組んだ奴が居る、ということ間違
はないと思う。

「その可能性は十分にあるじやろう。犯人の目的は不明じゃがな」
「当ても、あまり目立ったことはせず、裏で何かやっていた可能性
もあるんじゃないですか？」

「それだと、情報が少ないな。犯人が動くまで、どうしようもない
かのぉ」

「喜美子様でも、どうにもできないんですか？」

「……できる限りのことはやってみよう。今は何とも言えんがの」
「……わかりました。それでは、この家にある戦争の記録書を見せ
ていただいてもかまいませんか？」

「おお、おお、好きなだけみんしゃい。それも目的の一つじゃろ」

ゆきなは、「ありがとうございます」とお礼を言っ立ち上がった。
そして俺に「行きましよう」と手を差し伸べてくれるのだが……

「あの……どうかしましたか？」

「あ、あのさあゆきな。俺……今、とても苦しいんだ」

「え！？ 今まで黙っていたのは、具合が悪かったからなんですか
！ 大変です、すぐに病院に行きましょう！」

「あ……いや、病院に行く必要はない。つつか動けない」

「大丈夫です！ 私がおぶっていきますから」

「だから、そういうことじゃなくてね。……足が」

「……攣ったのですか？」

「……痺れた」

それから移動したのは、十分後だった。

第六話「仮名」(前書き)

前話の投稿から、数か月が経過してしまっているので、話を忘れて
いる方

または、一話も読んでいない方は、前から読むことをオススメしま
す。

第六話「仮名」

過去に起こった出来事は本などに記録される

そういつた本は、何百冊にもなつてくると保管に困るため、倉に移動させられる。

しょっちゅう見るわけでもないから、何年も放置されていると、埃が積もってしまっている。

現在居るのはその倉で、どのくらい掃除されていないんだろう以前に、いつから人が入らなくなったのだろう、と疑問を抱くほど、最悪な場所だった。
ずっとここに居るのは、身体に良くないだろう。

「けほつ……あまりに汚くて、触りたくもないんだけど」

本を一冊手に取る度に埃が舞う。

それがもろに顔に来るものだから、目が痛くなるし息苦しくもなる。

「ずいぶん前のことですからね。結構奥の方かもしれません」

「奥つて……いろいろ物がありすぎて、先に進めないんだけど。まさか、これを全部どかせと？」

ここにあるのは本だけではない。何に使うのかわからないモノがたくさんある。

なぜか土管もあるのに驚いた。誰が運んできたんだよ。

「喜美子様は、ずいぶん前に本を読んだつきりみたいです。一度読めば頭に入るらしくて」

「あの人は……。だったら婆ちゃんに聞いた方が早いのでは？」

「自分たちで見た方が覚えます。人から聞いたものを覚えられますか？」

「……無理です」

聞いただけで覚えられるなら苦労はしない。

それに、興味のない話を聞いているのも眠くなって仕方がない。戦争のことに興味がない、というわけではないが、たぶん婆ちゃんの話は長くて疲れて、頭に全然入ってこないだろうと、予想ができてしまった。

「ああくそっ！ 一気にどかしたい！ このままじゃ、らちが明かねーよ」

「そうなんですけど、慎重にやらないと、余計に埃が舞うんですけど」

すでに一時間以上は経過している。

扉は開けっ放しにすると、風が入ってきて中の埃が飛んでしまうため、閉め切っている。

そのため、中はとても暑く、すでに汗まで掻いてしまっているのだ。

「……なあ、聞きたいことがあるんだけど、いいか？」

「……なんですか？」

「さっき、名前がないって言ってたけど、あれってどういう意味だ？」

「……そのままの意味ですよ。私の今の名前は『工藤ゆきな』です」

お互いに反対方向を向きながらの会話だから、表情は確認できない。

「それは、仮の名前だろ。『工藤ゆきな』本人は別に居る。そうじ

やなくて、元々のお前の名前だよ」

「だから、ないって言ってるじゃないですか」

「生まれてきた時に、親に付けてもらったんじゃないのか？」

「それは普通の人です。私は普通じゃないですから」

「普通じゃないって……」

「そういうことです。生まれてきたら名前を付けられる、そんなのが当たり前じゃない人も居るってことですよ。だから私は仮の名を語ってるんです」

人は生まれてきた時に、親が名前を付ける。

それが当たり前と言えば当たり前なのだ。それが最初に、子に対する親の愛情だと思う。

じゃあ、名付けられないってどういうことなのだろうか。

呼び方に困る、それとは別に、口にはいけないような、そんな意味が含まれているのだろうか。

「……気にしないでください。複雑な理由とかじゃないですから。

ただ、他とは違うやり方をするんですよ、私の親は」

「他とは違う、か。それじゃあ、一緒に暮らしている人も、名前がないのか？」

「え？」

「ほら、最初に会った時に言ってたじゃん、他に一緒に暮らしている人が居るって。護衛のためにあの小屋に居たのなら、やっぱりゆきなと同じ護衛の人なんだろう？」

旦那ではない、とあの時は睨まれたっけな。

「妹なんです。一緒に住んでるの。それに、あの娘にはちゃんと名前がありますよ」

「へえ……。妹は何て名前なの？」

「ユウって名前です。早めに名前をもらえて良かったです」

嬉しそうに語るゆきなだが、事情をまったく知らない俺にとってはどう返事していいのかわからない。

妹には名前があり、姉にはない。

しかも、妹は早めに名前をもらったって……。

「えーと、その妹さんは、あの家で留守番？」

あの家とは、俺の家の隣にある一軒家のことだ。

もともとそこには、住人が居たのだが、訳あって今はゆきなたちが住んでいる。

「いえ、ちゃんと付いてきていますよ」

「……へ？」

ゆきなが指をパチンと鳴らすと同時に、背後に人の気配を感じた。

恐る恐る振り返ると、そこに一人の少女が立っていた。

見た目の年齢は十四、五歳くらいだ。

髪の毛を両側で結んでおり、黒髪のツインテール。

ツインテールと言っても、そんなに長くはなく肩の上ぐらいの長さだ。

「お呼びでしょうか、姉さん」

「まだ、神さんに紹介していなかったからね。それとついでに、探し物の手伝いを……」

「……ついでは紹介の方で、本当は手伝いですよね」

表情ひとつ変えずに、ユウは姉のゆきなを鋭い目つきで見ている。

無表情で感情が読めず、必要なこと以外はしなさそうな印象を受け

た。

要するに、真面目そうな人だなあって感じ。

「まあそう言わずに、ご褒美あげるから」

にこり、とゆきなほは微笑みかけた。

「……では、外出許可をください」

「う……そうきたか。でもまあ、社本家に居る間だけならいいか」

「ありがとうございます。それでは、少々お下がりください。社様も」

言いながら、ユウは前に歩き出した。

そして奥の方で立ち止まると、右手を横に挙げた。

そのまま右手を胸の前に移動させ、二本の指を立てた。

「これは、もう少し下がった方がいいですね。神さん、もう二、三歩下がってください」

ユウの動きから、何かを感じ取ったのか、ゆきなが俺の前に手を伸ばして制した。

何が起こるか分からない俺は、ただ言われた通りに三歩下がる。

「波っ」

左から右へ、横一線に斬ると同時に目の前の本が一気に上へ吹き飛んだ。

当然溜まっていた埃も舞う。ある程度離れてはいたが、やはり飛んでくる埃は避けられず、もろに直撃した。

一番近くに居たユウは、そんなこと気にせず崩れ落ちた本の山を

あさっていた。

「探しもの、これ」

数冊の本を差し出してきたのを、ゆきなが確認し「これよ！」と感謝の喜びを見せた。

見つかったはいいが、後始末はどうするんですかね？

こうなるのが嫌で、地道に探していたわけなのだが、こうなってしまつては、手のつけようがない。

「それでは、私はこれで」

そう言い残して、ユウは目の前から居なくなった。

「ちょっと待って！ これ、俺たちがやるの？」

「うーん……そうなりますね。手分けして片付けましょう」

「はあ……これが嫌で地道にやってたのに、これなら最初からやれば」

「残念ながら、私の場合ですと、これより散らかってましたよ」

「つまり、最小限に抑えたってこと？」

「はい、でもあの娘の場合、もう少し押さえられたんですけどね」

片付けながら、ゆきなは言った。

「だったら、もう少し押さえてほしかったよ」

「うーん。外出許可を出したからだと思いますけどね」

「……外出許可って何？ 自由に外出できないの」

「そんなことはないです。ただ、今は護衛中ですので、職場放棄みたいなものですかね」

「それだと、俺のせいで自由を奪われているってことだよね？」

とてつもなく申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

俺としては巻き込まれたのだが、過去から続いている戦いの関係者には原因は俺で、無関係とは決して言えない。

普通の人間には、手が負えない相手ばかりで、俺なんかは役立たず。どうにかできないものかと、この間から考えてはいるのだが、未だ答えは出ず。

「私の場合ですと、全然問題ないのですけど。あの娘この場合は、ずっとというのは難しいみたいです」

「いや、それが普通なんだよ。突然知りもしない人の護衛役を任されて、拳句の果てに外出は控える、なんて言われたら、俺だって耐えられないと思う」

「……それって、私が普通じゃないみたいじゃないですか」

「へ？」

突然すねたような声でゆきなはそう言った。

今は護衛のためと、ずっと俺のそばにいてくれるから、いつ敵が来ても安心できる。

ただ、俺という存在が誰かの自由を奪っているのだとしたら、このままがいいとは思えない。

「……何でだろうな」

「何がですか？」

「どのくらい前なのか知らないけどさ、喜一という存在が、どれだけ多くの人の人生を滅茶苦茶にしたのかも知らないけど……その時代にとどまらず、生まれ変わって、その復讐の相手がそれを覚えていくわけないとわかっていながらも、それでも構わないといった感じで、恨みを晴らすようにしている」

恨みを晴らすってことは、普通はすでにその人たちが居るわけがない。

生まれ変わったとしても、その恨みを引きずるのは不可能だ。

「……それはわかりません。ただ、この現代まで生きている時点で、人間ではない、ということですよ」

「それって、復讐するために、人間を捨てたってことだよ……ってことはさ、復讐を成功させなければ、死ぬことがないってことなのかな？」

「……かもしれせんね。現にこの前のくのーも、あなたを殺さない限り死ぬことはないみたいです」

それでもなお、俺を狙うとしたら、恨みのためではなく、死にたいがために襲ってくる可能性もあるかもしれない。

何か、そういうのって嫌だな。

恨みだけで生きているなんて……原因は喜一だったとしても、いったいどうしたらここまでの事態になってしまうのだろうか。

人生をやり直す、という手段を選ぶことなく何百年も生き続けるのは、苦痛だったのではないのだろうか。

「喜一がいったい何をしたのか、それがわからないと、どうにもならないよな」

「そうですね。人をここまでにしてしまうことって、何なんでしょう」

きつとそれは、本人達以外には理解できないことなんだろうな。などと思いつながら、散らかった本を片付けて行く。

最小限に抑えたという本の数は、普通の家庭にある、びっしり詰まった本棚を一つひっくり返したというレベルではない。

かく本棚十個分はあると思う。

大量の埃を被り、暑さと労働で汗はびっしょり、早く風呂に入っ
てさっぱりしたい。

「こっちは片付きましたよ」

「ああ、悪い、こっちはもう少しだから、先に戻ってもいいぞ」

「そういうわけにもいきません。お手伝いしますよ」

「悪いって、埃と汗で気持ち悪いだろ？ 先に風呂に入ってさっ
ぱりして来いよ」

「本家といつても、安心できないので」

一時も俺の傍から離れない、という表情だ。
安全な場所などない、と言っているようにも思える。

「心配しすぎなんじゃないか？ 敵もこんなところまで襲ってきや
し
ないと思っぞ」

「用心することに越したことはありません」

「……………」

何を言っても聞かなそうだ。

あっちも、好きでやっていることでもないだろうし、生まれた時
からの使命？ という理由で仕方なくだろうから
文句など言えるわけもない

「……………わかった。じゃあ、さっさと終わらせよう」

「はい」

笑顔でそういうと、ゆきなはテキパキと片付け始めた。

熱気で倉の中はサウナ並みに暑いし、額に汗が溜まりダラダラと
頬を伝い流れてくる。

水分補給の大切さを改めて知りながらも、この気持ち悪さから、早

く解放されるために全力で片付けるしかなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2036g/>

レイ & ユウ

2010年10月12日05時52分発行